腎尿路系疾患における尿中インターロイキン6(IL-6)の動態と学校集団検尿における尿中IL-6測定の意義

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/15425

学位授与番号	医博乙第1378号
学位授与年月日	平成8年3月18日
氏　　名	瀬野晶子
学位論文題目	腎尿路系疾患における尿中インターロイキン6（IL-6）の動態と学校集団検尿における尿中IL-6測定の意義
論文審査委員	主査　教授　谷口　昂
	副査　教授　松島綱治
	教授　並木幹夫

内容の要旨及び審査の結果の要旨

近年，さまざまなサイトカインが糸球体腎炎の進展に深く関わることが解明されつつある。著者は各種腎尿路系疾患患者を対象に，尿中インターロイキン-6（IL-6）をサンドイッチELISA法で測定，その臨床的意義につき検討した。さらに，無作為に抽出した学校検尿受診者を対象に尿中IL-6を測定，その結果から石川県における現行の学校検尿システムの問題点を明らかにすることを試みた。結果は下記に要約される。

1．ELISA法による尿中IL-6濃度は，従来のバイオアッセイ法による活性値と良く相関し，簡便性，迅速性，感度の点でも優れた方法である。

2．ELISA法による健康成人の尿中IL-6濃度は4ng／gCr.以下であり，腎尿路系疾患における尿中IL-6濃度は，活動性の炎症を有するIgA腎症，膜様増殖性糸球体腎炎，溶連菌感染後急性糸球体腎炎や，尿路感染症，尿中好中球の増加する川崎病などでは高値をとり，その推移は病勢と良く相関する。非増殖性糸球体疾患や非糸球体性血尿などでは，ほとんどが正常範囲に止まる。

3．腎生検を施行したIgA腎症，紫斑病性腎炎などのメザンギウム増殖性腎炎患者26名につき，メザンギウム細胞の増殖度と尿中IL-6濃度を検討した結果，軽度変化群では尿中のIL-6濃度は3.3±3.0ng／gCr.，中等度変化群では15.8±11.9ng／gCr.，高度変化群では46.2±25.6ng／gCr.であり，尿中IL-6濃度は増殖性病変を反映することが確かめられた。

4．学校検尿についての検討から，尿中IL-6が高値であった比率は，一次スクリーニングでは4.5%，二次スクリーニングでは7.1%，二次スクリーニングの結果，医療機関の受診を指示された群では16.5%と増加した。医療機関の受診を指示されながら未受診者が約30%にも及ぶことが明らかにされ，未受診者の18.8%に尿中IL-6高値が認められた。また，医療機関受診者で無症候性蛋白尿と診断された群に，尿中IL-6高値例が46.7%にも見い出されたことは問題であり，費用の点で問題も多いが，三次検査対象者には尿中IL-6測定を加えるなど，石川県における学校検尿の在り方の再検討が必要と思われる。

以上，本研究は尿中IL-6濃度の腎尿路系疾患における臨床的意義を検討し，病変部位の鑑別や病勢の良い指標となる可能性を示すに止まらず，学校検尿の場に仮りにIL-6測定を導入した場合の異常検出率から，現行の検尿方式や診断管理方式の再検討の必要性を示唆する成績を得たもので，学校保健の見地からも注目に値すると評価された。